令和２年度第２回別府市総合教育会議議事録

１　日　時　　令和２年８月３日（月）　　開会　午後３時　　閉会　午後４時

２　場　所　　別府市水道局３階　大会議室

３　出席者

（構成員）	別府市長	長野　恭紘
	教育長	寺岡　悌二
	教育委員	福島　知克（教育長職務代理者）
	教育委員	小野　和枝
	教育委員	山本　隆正
	教育委員	川崎　栄一
（事務局）	総務部長	末田　信也
	総務課長	牧　　宏爾
	総務課参事	本田　壽徳
	総務課主査	髙木　佳子
	総務課主事	中城　聡太
	教育部長	稲尾　　隆
	次長兼教育政策課長	柏木　正義
	教育政策課参事	吉田　浩之
	教育政策課参事	若杉　圭介
	教育政策課長補佐兼係長	釘宮　誠治
	教育政策課指導主事	重岡　秀徳
	学校教育課長	北村　俊雄
	学校教育課参事	志賀貴代美
	学校教育課参事兼総合教育センター所長	利光　聡典
	社会教育課長	矢野　義知
	社会教育課長補佐兼社会教育主事	縄田　早苗
	次長兼スポーツ健康課長	杉原　　勉
	人権同和教育啓発課参事	姫野　賢一

４　議　事

(1)　教育大綱「柱（案）」について

(2)　その他

発言者	発言の内容
総務課参事	定刻になりましたので、これより令和２年度第２回別府市総合教育会議を開会させていただきます。よろしくお願いいたします。 最初に、長野市長がご挨拶を申し上げます。
市長	皆様こんにちは。本日は大変暑い中、教育長はじめ教育委員の皆様方には、総合教育会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。そして、申すまでもありませんが、子どもたちの健全育成のために、日頃から何かとお力添えをいただいておりますことに、この場をお借りして改めて感謝を申し上げる次第でございます。 ご存知のとおり、別府市においても新型コロナウイルス感染症予防に現場の先生方をはじめ、行政一丸となって取り組んでいるところでございますが、全国的な状況から申し上げると、また感染が拡大している状況にあるようでございまして、大分県においても九十数日感染者がいないというところでありましたけれども、最近、数名の方に陽性反応が出たという状況の中で、別府市は観光地であり、例えば先日の４連休は非常に多くのお客さんが別府市にみえました。行政内においては、感染者は恐らく出るとの前提で、様々なシミュレーションをしながら子どもたちのことも考えて、とにかく医療崩壊や、重篤になる方・亡くなられる方をできる限りでないように防いでいくかとか、何を指標にするかというのはなかなか難しいところはありますけれども、とにかく観光で生きている街でありますから、正しく恐れながらも、経済活動も行っていかなければいけないと、私個人はそういうふうに思っております。なんとかおさまってくれればいいですけれども、そういうことを前提とした市政運営、また、現場の先生方と共に子どもたちを守っていくことにも力を尽くしていきたいと思っているところでございます。 今日の議題は、「教育大綱　柱（案）」についてでございます。今後４年間の教育の方向性を定めるものでございますので、皆様方の忌憚のないご意見を賜りますように、よろしくお願い申し上げて、冒頭のご挨拶とさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。
総務課参事	初めに資料の確認をさせていただきます。本日の資料は、まず、令和２年度第２回別府市総合教育会議、次のページに次第と書かれたレジュメ。それから、表紙に「議題１　教育大綱《柱》（案）」と記載されたものでございます。

	これより議事に入ります。先のレジュメの３ページ目、表紙を入れれば４ページ目にございます、別府市総合教育会議運営要綱をご覧ください。運営要綱第３条に「市長は、議長として会議の議事進行を行うものとする。」と規定されておりますので、以降は市長に議長として議事を進めていただきます。では、市長よろしくお願いいたします。
市長	はい。それでは、議事を進めさせていただきます。ご協力をお願いいたします。 別府市総合教育会議運営要綱第６条第２項の規定により、議事録署名は寺岡教育長にお願いしたいと思います。 本日の議題は、先ほど申しましたが、「教育大綱　柱（案）」でございます。委員の皆様方の活発なご意見をお願いしたいと思います。それでは、まず事務局から説明をお願いします。
教育政策課 指導主事	それでは、お手元の資料「議題１　教育大綱　柱（案）」をご覧いただきたいと思います。表紙をめくって１ページ目でございます。改めて確認ということでございますが、教育大綱の位置付け、理念ということで、教育大綱は教育委員会に権限があります、学校教育、社会教育関係等の部分のみならず、市長に権限があります、文化振興、幼保連携等々、そういうもの全体に係る大綱であるということで、改めてご確認をいただきたいと思います。 教育大綱につきましては、これまで事務局でいろいろ議論する中で、まだはっきりと決まっておりません。今後、変更することがあると思いますが、教育理念や方針で、しなやかにたくましく生き抜く人づくりというワードが、今固まりつつありますので、今後さらに議論を重ねて、しっかりしたものを作っていきたいと考えております。 続きまして、大綱の中身でございます。大きく４つの柱を今のところ考えております。 まず最初に、時代がどんなに変わっても、変わらない不易の部分ということで、柱１「変化には変化で対応できる人づくり」、それからもう一つ、柱２「ふるさと別府を愛する心をもつ人づくり」、それから、今後大きく変えていくということで、柱３「新たな学びへの大きな転換」、柱４「次代を生き抜く力を育む教育環境の整備」、この４つになっております。内容については、次のページから読んでご説明申し上げたいと思います。 まず１番目の柱、「変化には変化で対応できる人づくり」。これま

	でに経験したことがないコロナ感染症への対応やアフターコロナの「新しい生活様式」、Society5.0 に代表される新しい社会構造など日常生活が大きく変わろうとしています。どんなに時代や社会環境が変わろうとも、多様性あふれる別府で多様な人々と協力し合い、地域・家庭・学校のあらゆる「資源」が柔軟に対応できるようさらに充実させ、たくましく生き抜くことのできる人づくりを進めます。（1）「地域・家庭・学校の中でともに生きる人づくり」。人々のネットワークや生活の知恵あふれる地域、優しさと温かさにあふれた家庭、生きて働く力を育む学校等の「資源」を時代や社会の変化に柔軟に対応できるようさらに充実させ、たくましく生き抜いていくことのできる人づくりを進めます。（2）「多様性を受け入れ、多様な人々とともに生きる人づくり」。誰もが、ともに暮らしやすく、ともに働きやすい社会環境を作るために、多様な人々との様々な活動を通じて、互いに理解し合い、ともに協力しあい、自分らしく、よりよく生きる人づくりを推進します。（3）「生涯を通して健康に生きる人づくり」。これまでの慣例や習慣にとらわれず、子どもたちが健全な心と身体を、育て、全ての人が心身の健康を維持し、生涯にわたって生き生きと暮らすことができる人を育成します。 　続きまして、2番目の柱でございます。「ふるさと別府を愛する心をもつ人づくり」。観光を生業とする別府市では、観光客等への「おもてなし」の文化を別府の財産として育くんできました。これからも、相手の立場にたち、相手の思いをくみとり、心から感謝する気持ちとそれを表現する力が求められます。別府に住む全ての人が、自分を愛し、家族を愛し、地域を愛し、ふるさと別府に生きることを誇りに思う人づくりをさらに進める必要があります。（1）「『自信をもって取組めること』をもつ人づくり」。市民一人ひとりが豊かに生きていくために、自ら自信をもち、他者から尊重される得意なものをもつ人づくりを推進します。（2）「人と関わることを楽しいと感じることのできる人づくり」。他者との関わりを受け入れ、「他者から大切にされている」「誰かの役に立っている」「誰かに必要とされている」という気持ちを高める教育を推進し、「人と関わりたい」と思う気持ちをもつ人づくりに努めます。（3）「『おもてなし』の心あふれる人づくり」。地域や家庭、学校において隣人や保護者、友だち同士が互いに「あいさつ」を交わし、「ありがとう」と感謝の気持ちを表す環境づくりを進め、互いに他者を尊重する「思いやりの心」とお客様への「おもてなし」の心あふれる人づくりを推進します。（4）「別府の歴史や伝統、文化を知り、別府を誇りに思う人づくり」。別府の自然や観光、温泉、歴史、伝統、文化等を小学校期から

	系統的に学び、「ふるさと別府」を知り、別府で生きることに誇りを持てる人づくりを進めます。 　続きまして、柱３でございます。「新たな学びへの大きな転換」。これからの予想することが難しい社会では、一人ひとりが社会変革の担い手（チェンジメーカー）となり、日常生活の小さなことに気づき、疑問や課題意識を持ち、創造性を発揮して社会変革に挑戦する力が求められます。教育活動の最上位の目標を明確にし、目標達成に向け、その取組を客観的・俯瞰的に捉え直し、「自分の頭で考え抜く力」や「自分の考えを分かりやすく伝える力」、「学んだことを活用し実行する力」などを育む教育へと転換します。（１）「全ての人々が「ワクワク」する学びの推進」。これまでの一律・一斉・一方向型の教育のあり方が一般化している中、一人ひとりのワクワクする感覚を呼び覚まし、創造的な思考を掻き立て、自ら問いをたて、その納得できる答えを他者との協働により見いだす学びを推進します。（２）「『自らの学び』を促す教育活動への転換」。教育関係者が、「学習者の言動に寄り添う」「学習者の思いを聴く」「指導者がどう支援したらいいか尋ねる」など、学習者自らが能力を発揮できるように、学習者が主体となって学びを展開していく活動への転換を推進します。（３）「ICT を活用した新しい学びの展開」。多くの情報がネット上に顕在している中、これらにアクセスして無駄なく情報を入手するスキルや、情報を整理して意思決定に必要な情報としてまとめるスキルなどを身につけ、ＩＣＴ機器の活用による「わかりやすい授業の実現」「一人一人の能力や特性に応じた学びの実現」「子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学びの実現」による新しい学びを推進します。 　柱４「次代を生き抜く力を育む教育環境の整備」。アフターコロナにおける「新しい生活様式」への対応が求められる中、感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減しつつ、教育活動を継続し、地域・家庭・学校が一体となって健やかな学びを保障する教育環境の整備に努めます。（１）新図書館。新図書館は、「ひとりひとりの暮らしと創造のよりどころへ」を基本理念とし、「教育」「健康・福祉」「産業」「アート」「まちづくり」に貢献する地域の創造拠点として、また、市民が憩い、安らぎ、暮らしを楽しむサードプレース（自宅や職場とは離れた心地よい第３の居場所）としての公共空間として機能することをめざします。（２）新学校給食共同調理場。新学校給食共同調理場は、整備基本計画に定める「安全・安心」「おいしい給食」「食育・地産地消」「食物アレルギー対応」の４つのコンセプトに基づいて整備し、子どもたちの健やかな成長に欠かすことのできな

	い、心にもからだにもおいしい日本一の学校給食の提供をめざします。（３）学校のICT環境。次なるSociety5.0時代を生きる子どもたちに、「情報活用能力の育成」や「ICT機器を効果的に活用したわかりやすく深まる授業の実現」など「新たな学び」を実現する更なる環境整備を進めます。以上でございます。
市長	只今事務局から説明がありました。順に協議を進めてまいりたいと思います。まず、柱の１について、皆様方からご意見があれば、お願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。「変化には変化で対応できる人づくり」の項でございます。では、川崎委員さんどうぞ。
川崎委員	「変化には変化で対応できる人づくり」と、２番の「ふるさと別府を愛する心をもつ人づくり」の両方に関連するかもしれませんが、今回の案を見させていただいた上で、私が企業人として考えたときに、いわゆる地域や家庭、学校の中で生きる人づくりということですけれども、ある意味では、子どもたちに地域で学んだり、家庭で学んだり、学校で学んだりとか、それぞれの場所で学ぶということをキーワードにしてはどうかと思いました。特に、地域で学ぶということについては、やはり別府は観光業で成り立っているということで、環境に生業を持つ、そういった所に、例えば、社会教育として子どもたちに学ばせるとか、あるいは、私はその方の職業なのですが、建築関係もやはり地域にとって重要な産業だと考えておりますので、そういった建築業のうちインフラ、教育環境の例として、建設予定の新共同調理場の建設現場を子どもたちに見学させるなど、そういう社会教育も重要と思っております。我々も学生を採用しますが、自分が小学生のときに家を建てたのを見て、大工さんになりたいと思ったという人が実際にいました。そのときに思ったのは、これからの人口減少の中で別府市が生き抜いていくには、子ども達が大人になってまた別府に戻ってきてもらって、また地域に貢献してもらうために、子どもたちの教育において観光業、建設業あるいは医療・福祉について、地域で学ぶという社会教育の観点もあるといいと思います。以上でございます。
市長	ありがとうございます。今のお話は、１と２だけでなく、全般にかかってくるような重大な話だったと思いますが、これについて事務局から何かありますか。
教育政策課	ご指摘をいただいたことにつきましては、もっともだと思いま

指導主事	す。今学校では、子ども達が地域に出て、自分が体験したいお店や会社に行き、短い時間ですが実体験をしているような活動をやっております。 実体験をしているような活動の時間を学校教育の中にとって、子ども達が地域に出ていくという方法もありますし、いわゆる地域あるいは産業界のプロの方々が学校に来て、一緒に何らかの教育活動をする時間の確保という方法もあります。いずれにしましても、具体的な手立てを考えていくことも、これからの大きなテーマであると思います。本日いただいたご意見を活かしていきたいと思っています。
市長	ありがとうございます。
教育長	質問をよろしいでしょうか。
市長	教育長。
教育長	１点目は、柱１の「変化には変化で対応できる人づくり」についてです。Society5.0に代表される新しい社会構造など日常生活が大きく変わろうとしているとのことですが、どのような社会を予想されているのか。第１次から第５次の社会に入ってくるということであると思いますが、情報社会になり、さらにSociety5.0によりどのような社会になるという想定をもとに教育大綱を作成しようとされているのですか。 ２点目は、「たくましく生き抜く」の「たくましく」というのは、どのような人をイメージして「たくましく」と書かれているのですか。 以上２点について少し説明していただけますか。
市長	Society5.0 によりどのような社会になると想定しているのか、「たくましく」とはどのような内容か、の２点について説明をお願いします。
教育政策課 指導主事	Society5.0については、総務省かどこかでＩＣＴの情報量が膨大な量で５Ｇと今言われています。我々の生活が Society5.0 に近づくようになり、サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムによる社会の国が示す例は、ドローンが飛んできて、家に宅配便を持ってくるとか、スマホで買い物の予約をすれば、近くの

	商店でその商品が買えるとか、冷蔵庫に残っている食材でできるメニューをＡＩが自動的に考え、レシピを提案したりとか、あるいは、５Ｇによって既に実現してきていると思いますが、運転手が必要ない車が街の中を走行したりとか、そういう今までにない生活環境が私たちや子ども達の周りにある社会であると思います。
教育長	今の職業の半分は無くなるとよく言われますが、そのような社会とは、今ご説明いただいたようなイメージで捉えていいのですか。
教育政策課 指導主事	大学の先生の話によると、いわゆる機械を操るような職業については無くなるけれども、創造的なクリエイティブな仕事については引き続き残っていくだろうということですので、そのあたりも少し研究しつつということになります。 次に、たくましさの捉え方は、いろいろあると思います。冒頭にありました「しなやかでたくましく」については、また事務局で具体的にイメージする人の姿というのを、今後さらに協議を重ね、そのあたりをしっかり書き込んだものをご提示したいと思います。
教育長	ありがとうございました。
市長	その他ございませんか。小野委員。
小野委員	たくましくということですが、今の世の中は、当たり前にあったことも、ライフスタイルが急に変わっていって、学校の関わり方や、終身雇用制や、家族の関係など、急に様々な環境が変わっていく中で、変わっていくことに対して、子ども達がどうストレスに感じるかということがとても大事だと思います。そして、そのストレスを避けるのではなく、どうやって乗り越えるかを考えなければ、大きくなったときに、ストレスを乗り越えることができないと思います。ストレスを乗り越えることを学ぶのは、大きくなってからでは遅すぎると思うのです。今どのように取り組んだらいいかということを考えて、小学校、中学校でやっていかなければいけないと思います。そのために、私も色々考えたのですが、やっぱり、その子の良いところを早く見つけてあげることだと思います。好きな事、良い事ならがんばっていけるし、それを強みにしてやっていけることが、幸せに繋がり、ストレスを乗り越えることができるのではないかと思います。 たくましく生き抜くというのは、とても難しいことです。愛情を

	もって育てる、全ての人からの愛情が必要ということではなく、誰か１人でもいいから、その子にとって自分を見ていてくれる、そういう人がいるだけでも、随分違うと思います。たくましく生き抜くことができたら、いじめとか、そういうのにも打ち勝っていけるのではないかと思います。
市長	「たくましさ」については、小野委員さんの視点でのご意見としてお伺いさせていただくということで、よろしいですか。 では、貴重なご意見としてお伺いさせていただくということで、また反映させていただければと思います。では、福島委員さんお願いします。
福島委員	柱１の「変化には変化で対応できる人づくり」ですが、これには、まず、一を知って百を知るということが必要だと考えます。例えば、読み・書き・算盤、つまり、国語や、算数や、計算等ができないと社会では生きていくことはできない。読み・書き・算盤がきちんとわかれば、つまり、１を完全に知ってしまえば、その後の社会の中で、２についても、あっこんな問題か。あれを応用できる、あれも応用できる。となります。「変化には変化で対応できる」というと、難しく思えますが、１をきちんと知れば百を知ることもできますから、１を徹底的に教えることが重要です。この人にはこうやって１を教える、あの人にはまた違う方法で１を教える、というように、徹底して１を教えてしまえば、「変化には変化で対応できる人づくり」ができそうな気がします。
市長	ありがとうございます。「変化には変化で対応」とは、奇抜なことをするということではなくて、基本をしっかり押さえておくことで、１で基礎がわかれば、２にも、３にも、４にも柔軟に対応していけるということであると私は感じました。 以上を参考にして、基本方針に盛り込んでいくことをお願いしたいと思います。 つづきまして山本委員、お願いします。
山本委員	私は、１（２）「多様性を受け入れ、多様な人々とともに生きる人づくり」について、ご紹介させていただきたいことがあります。資料を用意していますので、ご覧ください。 別府は国際交流都市であることを実感しています。ＡＰＵ大学があることもあって、外国人が非常に多く住んでいると思います。コ

	ロナ渦で国際便が運休している中でも、市内には外国人が多くいらっしゃいますし、私の病院も日常的に外国人が受診にみえます。 その中で、最近知り合った方なのですが、大石佳澄（オオイシ　ヨシキヨ）さんといいます。大石さんのことを私は今まで全然知りませんでした。皆様の中には、ご存知の方がいらっしゃるかもしれません。 大石さんは、別府市内で２か所のシェアハウスを運営していらっしゃいます。そのシェアハウスは国際シェアハウスで、外国人と日本人の交流ができます。大石さんに聞くところによると、このようなシェアハウスは、東京などの大都市にはありますが、地方にはあまりなく、福岡に１軒ぐらいとのことです。 さすがＡＰＵ大学がある国際都市別府ならではのものなのかなと思いますが、シェアハウスでどのような生活をしているのかというと、日本人と外国人とが一緒に、英語で生活をしています。実際に入居している人は、ＡＰＵの学生さん７割とのことです。ＡＰＵハウスに入居できなくて、それでも国際交流をしたいという志の強い人、それから、ＡＰＵハウスに外国人で入居したけれど、１年後に退去しなくてはいけないらしくて、その後にも国際交流を続けたい人、そういう人たちの他に、ＡＰＵで働く外国人職員とか、あとは、これはびっくりしたのですが、社会人留学、例えば、イタリアにピザの勉強に行きたいなど、ちょっと英語の勉強をしたいなというときに、ここに半年、１年滞在して語学力を磨いて、海外に行くといった方が３割程度いて、日本人と外国人の交流ができているそうです。 海外の人もネットで見て「こんなシェアハウスがある別府に行こう」と、ワーキングホリデービザで去年から別府に滞在している人もいます。 このようなことが、まさにここに書いていることの例のひとつと思います。外国人との国際交流の多様性という観点からすると、とても良いものがこの別府にはあることを実感して、海外への移住や留学を目指す日本人を別府へ呼び寄せたり、今はまだコロナで来れませんが、コロナ渦が落ち着いたときには、ぜひ、海外からのバックパッカーを短期ではなくて長期で受け入れるような施策も実施できるのではないかと思います。 教育委員としては、是非、小中学生をこのような方々と交流させることが大切だと、常々思います。日本人は海外に行かないと、日本の中だけではやっていけないと思います。「たくましく生き抜く」ということは、海外に行くということも含まれると思います。

	そう考えますので、別府にはこういうのがありますよ、と小中学生に紹介しています。紹介することで、誰か一人でも英語を勉強していくきっかけになるような、そんなことができれば、それこそがストレングス、長所を伸ばしていくことにもつながると思います。 大石さんは、別府大学の英語の非常勤講師を年に数回しているそうです。また、Uターンの方や移住者の方に、起業家としてレクチャーをしたり、コメントをしたりしているそうです。２年ほど前には、大分合同新聞に掲載されました。 シェアハウスのような良いものが別府にはあるので、一つの例として、こういうものも活用しながら、変化に対応していく施策を繋げていくといいのではないかと思い、紹介させていただきました。
市長	ありがとうございました。まさに、別府ならではの教育環境がそこにあるということですね。 実際、小学校、中学校の中には、ＡＰＵとの交流や別府に居ながらの留学体験を実施し、交流を増やしているところがある状況で、大石さんのような方がいらっしゃるというのも、ひとつ大きな別府の魅力だと思います。別府ならではの話を聞く機会など、特別な経験をさせてあげられるということにこだわって実施していただけると、最終的には海外に行って経験するのが一番なのでしょうが、その前に、別府に居ながらにして、日常とは異質な世界をちょっと体験できるというのは、別府の魅力でありますので、ぜひ山本先生の今のご意見を参考にさせていただいて、盛り込んでいただければと思います。 続きまして、大きい柱の２です。 「ふるさと別府を愛する心をもつ人づくり」について、皆様方にご意見をいただきたいと思います。１と重複することがあると思いますので、特にこれだけは、ということがあれば、皆様からご意見を伺いたいと思います。 福島委員どうぞ。
福島委員	「ふるさと別府を愛する心をもつ人づくり」ですが、いくらふるさと別府を愛していても、将来別府で生活していることができなかったら、どうしようもないと思います。ですので、自分がしたい仕事、就職先が別府にあれば、別府で生活していけますが、なければ別府から出ていかざるを得ないので、別府を愛する気持ちがあっても、別府に定着できない。その点は、先生や指導者に、一工夫していただく必要があるように感じます。医者になりたいのであれば、

	医学部があり、別府で就職もできる、自分の父親が別府で事業をしていれば、別府で就職できる。しかし、パイロットの場合は、別府では就職はできません。そこをどうやって先生や指導者が分けていくか、一番問題だと思います。別府には何もないから、みんな面白い東京や福岡などの都会に行ってしまう。ここをどうやって食い止めるかということが一番の問題なのですが、別府で生活できる、別府が楽しいと思える状態を作るのが重要だと思います。
市長	福島委員さんのご意見につきまして、別府もそのために今別の部門で「ツーリズムバレー構想」という、観光産業の集積地を目指していこうとしています。働きたいと思える様々な仕事が別府にあるように、そういう産業を起こしていこうと、観光学部ができるＡＰＵとタッグを組んでやっていけるのでは、と模索しています。福島委員が言われるのは、別府を愛するには、アイデンティティの部分というか、私が生まれたふるさとの原風景だから、理屈なしに好き、ということよりも先に、まず現実的なものがありきであるということでしょうか。ふるさと別府が好きという別府愛の気持ちと別府で生活できるということが二つそろって初めて、一生別府と何らかの関りを持って生きていってもらうことができるということだと思います。そういう観点からも、ぜひ、もう一度ブラッシュアップをしていただきたいと思います。 では、山本委員どうぞ。
山本委員	定例の教育委員会で言ったかもしれませんが、４の「歴史・伝統・文化を知り、自分を誇りに思う人づくり」に、私はこだわりたいと思います。 私も別府の歴史・伝統・文化をもっともっと知りたいと思います。 具体的に別府の歴史・伝統・文化をどう伝えていくのか、ということが重要だと思います。 一つ例を挙げると、盆踊りです。その都市独自の盆踊りの曲を持っているという、それだけで他の都市にはない魅力だと思います。地元の盆踊りではなく、東京音頭を踊っている地方もあると思います。しかし、別府には、別府音頭だけでなく別府の盆踊りの曲が複数あります。それをぜひ、復活させていただきたい。ぜひ、小中学校で踊れるようにしていただきたいと願っております。
市長	その点につきまして、事務局よりお願いします。亀川では、地踊りを教えているとのことですが。

教育政策課 指導主事	ご指摘は、ごもっともだと思います。地域で開催する盆踊りに子どもたちもできるだけ参加していますし、学校でも、体育大会で盆踊りを組み入れ、事前の練習には、地域の詳しい方に来ていただくなど、学校現場と相談しながらできるといいなと思っております。
市長	山本委員どうぞ。
山本委員	光町も盆踊りを開催していますが、危機的状態です。他地域では、町内で盆踊りを開催できない所もあると聞いております。文化を継承する目的でよろしくお願いします。
市長	ありがとうございました。小野委員どうぞ。
小野委員	私も先ほど福島委員からご意見があったように、一旦大学で外に出ても、卒業したら家の都合や家業の都合で帰ってくる子もいますが、就職先がないから、と帰ってこない子もいます。外で就職しても、結婚して、子どもを持って、そのときにやっぱり別府を愛する心があったら、別府で子どもを育てたいと思う気持ちがあると思います。今の働き方は、以前と随分変わってきていますので、東京など都会にいなくても地方でできる職業もあると思います。あるいは、別府にずっと在住しなくても、行き来しながらできる職業もあると思います。そのような仕事をするときに、助けてくれる機関があれば、随分変わると思います。別府が発展していくためには、人材は必要だと思います。こういう視点もあることを考えてやっていただきたいと思います。
市長	まさに小野委員のご意見にあった中間支援団体については、別府ビービズリンクという、半官半民でいいとこどりの団体があります。ビービズリンクの事業、特にワーケーションやテレワークに関する事業なのですが、最近国の方もやっていこうと認めてくれています。ビービズリンクと学校との連携なども僕はおもしろいんじゃないかと思っています。それもまたぜひ、挑戦をしてみてくれたらなと思います。 では、川崎委員お願いします。
川崎委員	「ふるさと別府を愛する人づくり」についてです。別府には、観光や文化等、いろいろなものがあると思いますが、ＩＴ環境が整い、

	いろんなことが地方でできる時代になってきて、また、コロナの影響もあってか、一極集中から地方へという流れの中で、別府の新しい魅力を「ふるさと別府」の中に入れると、それが「新しいふるさと別府」になっていくように思います。さきほど市長が言われたビービズリンクのような、スタートアップ企業、アートであろうが、ＩＴであろうが、いろいろあると思いますが、いわゆるスタートアップ企業が、別府自身が持っている潜在的な魅力を新たな別府の文化として作っていくという観点からも取り組んでみてはと思います。
市長	別府は何やっても許される街みたいな、何かそういう雰囲気がすでにありますが、そういう視点から見ると、別府は自己実現の街だと、最近思います。自己を実現できる、自分の夢を実現できるのが別府であると思います。そういう雰囲気づくり、そういう土台づくりが随分進んできたと自負していますが、それをさらに進めて、面白い人たちが集まってくるような、新しい産業が起こってくるような、そういうイメージということですね。 事務局、よろしくお願いします。 その他はよろしいでしょうか。 続きまして、３番目の「新たな学びへの大きな転換」につきまして、皆様からご意見を伺いたいと思います。福島委員お願いします。
福島委員	「新たな学びへの大きな転換」についてです。ワクワクする学びの推進とありますが、私にとって、ワクワクするのは、孫と遊ぶときです。たぶん私がワクワクするから、孫も非常にワクワクしていると思います。具体的に何をしたときに私がワクワクして、孫もワクワクしているかというと、人とちょっとしたものを食べに行ったときもワクワクしますし、公園に行って遊ぶときもワクワクします。 つまり、体験学習する場がこの街にあると、その体験学習が新たな学びに繋がっていくと思います。ガイダンスのように体験学習ができる場を作ることができれば、自分がワクワクしながら孫と遊んで、孫もワクワクするという流れが完成すると思います。以上です。
市長	それは、ソフトでしょうか、ハードでしょうか。具体的に何か福島委員のイメージはございますでしょうか。
福島委員	無料で遊べる大きな公園、例えば南立石公園には、石垣がありま

	すが、小さい子どもはその石垣の一番上まで行って滑って下ると大変喜んで、なかなか帰ると言いません。あのような体験学習する場所が市内にあるといいですね。 　また、カブトムシも、勉強すればするほど面白くて、どんな場所に集まるかというと、蛍光灯です。でも、通常蛍光灯に集まるのはメスだけです。なぜなら、通常蛍光灯の色は青色だからです。そうするとメスしか来ません。オスを集めようと思ったら、ちょっと色がある光が必要です。例えば、黄色の蛍光灯が公園にあれば、そこにはオスが来ます。 　少し勉強して工夫を考えるようになると、ワクワク感を増すことができます。考えればいくらでもワクワク感ができて、大人も考える、子どもも考えるようになりますね。
市長	かなり詳しい話、カブトムシのオスとメスの話をありがとうございます。 　そういう具体的な体験、子どもたちが興味をもっているものをひとつひとつ深掘りして、たとえそれが万人受けするものでなくても、子どもたちそれぞれが深掘りしていって、それが教育となっていたと思います。我々が「勉強する場」と言っているのは、子どもたちにとっては「遊ぶ場」だったということもよくあると思います。 　子どもたちが興味を持つ具体的な体験、アクティビティと僕は言っているのですが、そういうアクティビティのメニューを作っていくということでしょうか。 　アクティビティのメニューを１人に一個ずつ作るものよし、みんなの前で発表して、興味がある子達で集まってやるとか、そういうのも楽しい、私がちょっとワクワクしちゃいますが、なんかそういうことなのかなと思います。 　その他にご意見お願いしたいと思います。山本委員お願いします。
山本委員	私は精神科医です。精神医療の現場で、リカバリーっていう言葉が今非常に注目をされています。治ってやるぞ。俺は病気を治ってこれをやりたい。という目標を掲げている人と、そうではない人とを比べると、リカバリーするぞと思っている人の方が、圧倒的に治りがいいというデータが明らかに出ています。 　おそらく教育の現場でも同じことが言えると思います。（２）の「自らの学びを促す教育活動への転換」ですが、「学習者の言動に寄り添う」「学習者の思いを聴く」「指導者がどう支援したらいいか尋

	ねる」など例をいくつか挙げていますが、僕はもっと踏み込んでいいのではないかと思います。 　要は、本人が将来こうなりたい、と希望を持ったときに、教育者が、それは無理じゃない？と言ってしまうと、もうそれだけで本人のモチベーションは落ちてしまいます。大事なのは動機づけであって、それが実現可能かどうかは学校の先生でもわからないのに、先生が「もうダメじゃない？」と言っているのを私は何度も見たことがあります。同じような患者さんを診ていて、「やっぱり先生ダメですよね？」と言われたときに、「諦めません。やりますよ。」と言ったことは何度もあります。リカバリーするという目標を持つことがいかに大事かを知っているからです。 　「本人の希望が実現するように、みんなが全力で支援します。希望を諦めずに実現させましょう。」と伝え、子どもたちに動機づけをさせる。そして、諦めさせない。そんな授業をぜひ、この新たな学びの中で目指してもらいたいなと思いました。 　次に（３）です。「ＩＣＴを活用」とありますが、別府市の課題である不登校・ひきこもりに関して、ぜひ「ＩＣＴを使って、取りこぼさないようにする。」という文言を入れて、不登校・ひきこもりの対策をしていただきたいと願っております。
市長	１人も取り残さない教育は、重要なことだと思っています。 　その他ご意見がございましたら。川崎委員おねがいします。
川崎委員	「新たな学びへの大きな転換」と「変化には変化で対応できる人づくり」のどちらに関係するのか、はっきり分からないのですが、教育大綱の一番の基本のところで、「たくましく生き抜く人」があります。 　近年の要は、災害です。豪雨災害や地震、コロナもある意味災害であると思いますが、そういう災害のなかで生きている子どもたちへの教育は、様々な災害があるということを前提に、自分たちが何をしなきゃいけないのかと、災害に打ち勝っていく、そういう観点を加えると、さらに進化できると感じます。
市長	具体的に、様々な災害に対して、一人一人がしっかりと対応できるようになるという、そういうイメージでよろしいでしょうか。
川崎委員	はい。

市長	確かに子どもたちが災害のことを考えるというのは、もはやこれは日常生活で当たり前になってきています。災害に対して危機感を持って、家庭の中で「もし連絡がとれなくなったら、どこで落ち合おうね」と話しておくとか、必要最小限これは準備しておくとか、そういったことは、子どもたちも当然考えるべきだと思います。まさにそういうことを考えていかなければいけない時代になっていると思います。 では、小野委員お願いします。
小野委員	子どもたちが将来、好きなことをして生活していけるといいのですが、なかなかそうはいきません。現在、小学校でキャリア教育を行っていると思いますが、もう少し身近なキャリア教育が一番大事だと思います。 今までは、講師が一人で講演し、大勢の生徒が聴く。という手法だったと思いますが、その手法を変えて、キャリアの方が何人かいらして、その方たちに生徒のグループを回って、生徒とやり取りしながら進めていくなど、もっと身近に感じられる手法で「こんな職業があるんだよ」と教えてほしいと思います。 様々なことを経験させ、機会をたくさん与えることが、将来必要となる能力を伸ばしていくことにつながると思います。楽しいとか、うれしいとか、幸せな感情を味わう体験をたくさん経験していると、何かあるたびに「がんばろう」と思えるんだと思います。
市長	ありがとうございました。 それでは、４番に入りたいと思います。「次代を生き抜く力を育む教育環境の整備」です。 具体的に、３つのハード設備を挙げています。皆さんのご意見をお願いしたいと思います。 福島委員どうぞ。
福島委員	「次代を生き抜く力を育む教育環境の整備」ということで、図書館、給食センター、ＩＣＴ環境についてです。 旅行が好きなので旅行によく行きますが、高級ホテルに泊まると最近は、トイレや風呂場は大抵が石造りです。日本のちょっと高級なホテルでもそうですが、全部クラシックです。環境整備というなら、石造りのトイレや風呂場だと子どもたちが一番落ち着くと思います。図書館や給食センターがどのような設計になるか知りませんが、トイレや風呂、シャワー室を設置するのであれば、ぜひとも石

	をふんだんに使ったものにすると、非常に重厚になって落ち着きがでます。是非とも、予算があるかもしれませんが、本物の大理石じゃなくて人工大理石でも結構ですから石造りにすると、いい子どもができそうな感じがします。市長お願いします。
市長	非常に予算的に厳しい折でありますけれども、本物に触れるというのは、子どもにとって確かに良いことだと思います。触れる物にこだわって設計したほうが良いとは思います。予算の話は後々してまいりましょう。ありがとうございます。 その他、ご意見ございませんでしょうか。山本委員お願いします。
山本委員	２番の学校給食についてです。最後に「心にもからだにもおいしい日本一の学校給食」と書いています。「日本一」を前にもってきて「日本一心にもからだにもおいしい学校給食」ではいかがでしょうか。 新聞を見ていても色々な意見が出ています。しかし色々な意見があっても、学校給食が本当においしければ、誰も文句を言わないと思います。みんなが心配するのは、共同調理場になるとおいしくなくなってしまうのではないかということだと思います。率直に申し上げて、私もその点は気がかりですので、ぜひ、日本一おいしい学校給食を作っていただきたいと思います。
市長	「心にもからだにもおいしい日本一の学校給食」の意味は、まさにそういうことだと思いますが、事務局はいかがでしょうか。そういう意味ですよね？違いますか？
事務局	そういう意味です。
市長	ということで、「日本一」というフレーズを前にもってきてもよろしいですか。 ではこれは変えるということでよろしいですね。 これまでの話し合いの場において、アレルギー除去食の対応やおいしい給食など、そこが後退するようでは、皆さんの納得は得られないでしょうと、これはもう常々言ってきました。私も最初から携わっていますが、本当に日本一の地産地消をやって、本当に日本一おいしい給食を作ってみせると思っていますので、こだわってやらせていただきたいと思います。 その他ご意見はございませんか。よろしいでしょうか。

	本日は、柱１から柱４までご意見をいただきました。 本日いただきました貴重なご意見は、教育大綱に反映させていただきたいと思います。 次回も引き続き教育大綱についてご協議をよろしくお願い申し上げます。 議題２「その他」で、事務局から何かありましたらお願いします。ありませんか。 では、委員の皆様から何か今日一日を通して、これだけは言っておきたいことはございませんか。寺岡教育長、言葉が少なくなっていますが、特にないですか。よろしいですか。 それでは、議事を終了とさせていただきます。ご協力いただきまして、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。はい、じゃあ、事務局に。
総務課参事	ご協議ありがとうございました。 これをもちまして、令和２年度第２回別府市総合教育会議を終了いたします。 本日はご参加いただき、誠にありがとうございました。

令和 3 年 3 月30日

別　府　市　長　長野恭紘

別府市教育委員会教育長　寺岡慎二